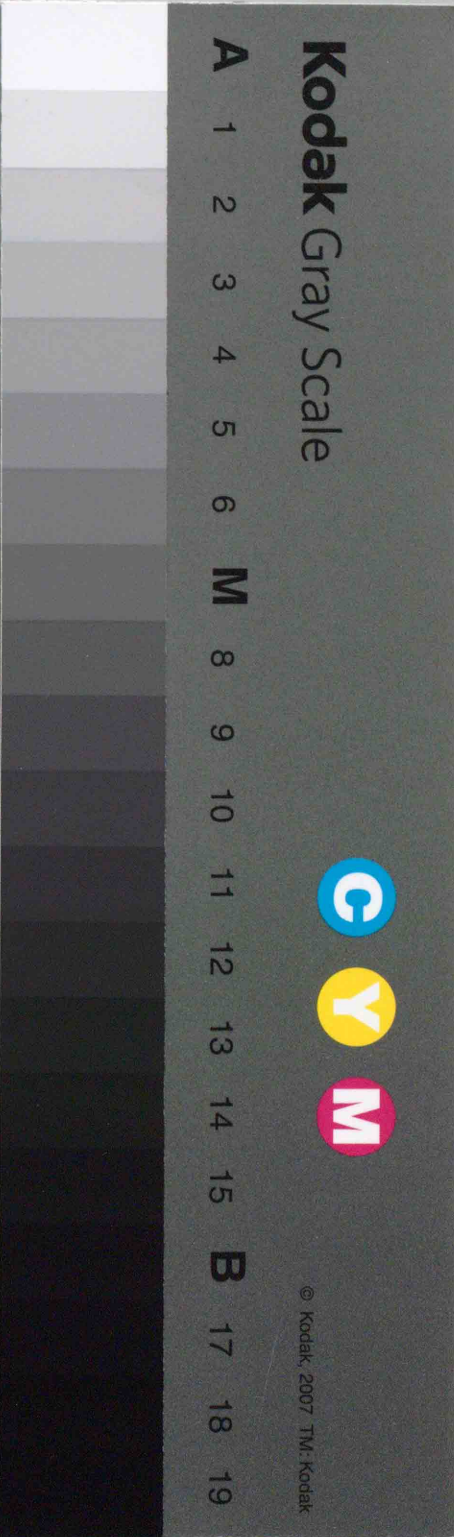
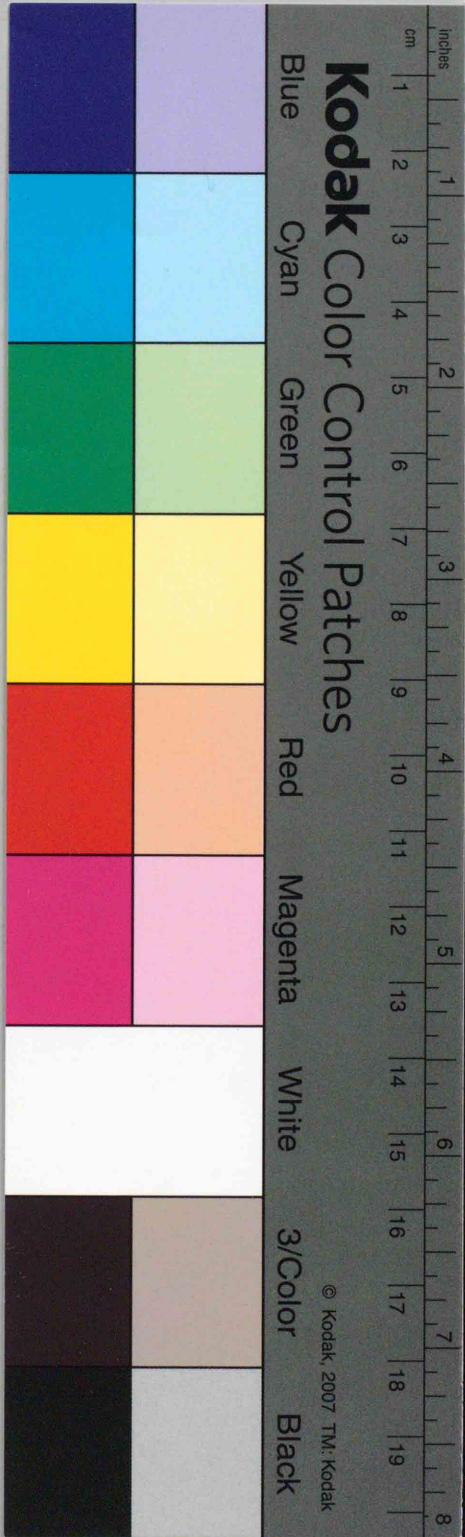
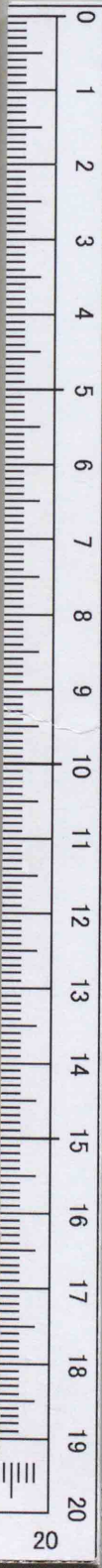


375.9  
No 4  
資料室

新制  
中學修身書  
卷二



40611

教科書文庫

4  
110  
41-1932  
200030  
2026

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM. Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM. Kodak





資料室

375.9

日八月二年七和昭

濟定檢省部文

No. 4

用科身修校學中

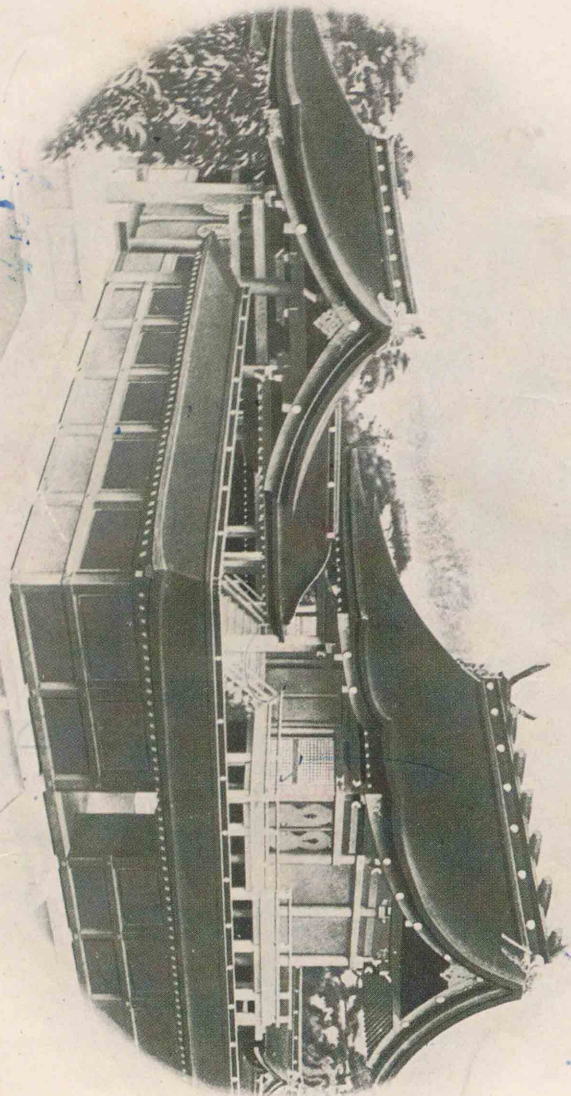
文學博士 野田義夫著

# 新制 中學修身書

精華房藏版



(股本知)宮神治明





明治天皇御製

なりはひはよしかはるとも國民の  
同じ心に世を守らなむ



天祖の神勅

豊葦原の千五百秋の瑞穂國は是れ  
吾が子孫の王とますべき地なり  
爾皇孫就て治らせさきく  
寶祚の隆えまさんこと  
天壤と與に窮なかるべし

五箇條ノ御誓文

一 廣ク會議ヲ興シ萬機公論ニ決スヘシ  
一 上下心ヲ一ニシテ盛ニ經綸ヲ行フヘシ  
一 官武一途庶民ニ至ル迄各其志ヲ遂ケ人心ヲシ  
テ倦マサラシメン事ヲ要ス  
一 舊來ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基クヘシ  
一 智識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スヘシ  
我國未曾有ノ變革ヲ爲ントシ 朕躬ヲ以テ衆ニ先  
ンシ天地神明ニ誓ヒ大ニ斯國是ヲ定メ萬民保全ノ  
道ヲ立ントス衆亦此旨趣ニ基キ協心努力セヨ



教育ニ關スル勅語

朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ  
樹ツルコト深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億  
兆心ヲ一ニシテ世世厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國  
體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス爾臣民  
父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉  
己レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ  
智能ヲ啓發シ德器ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ  
開キ常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義  
勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ是ノ

如キハ獨リ朕カ忠良ノ臣民タルノミナラス又以テ  
爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン  
斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民  
ノ俱ニ遵守スヘキ所之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ  
中外ニ施シテ悖ラス朕爾臣民ト俱ニ拳拳服膺シテ  
咸其德ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ

明治二十三年十月三十日

御名御璽



戊申詔書

朕惟フニ方今人文日ニ就リ月ニ將ミ東西相倚リ、  
此相濟シ以テ其ノ福利ヲ共ニス朕ハ爰ニ益國交ヲ  
修メ友義ヲ惇シ列國ト與ニ永ク其ノ慶ニ賴ラムコ  
トヲ期ス顧ミルニ日進ノ大勢ニ伴ヒ文明ノ惠澤ヲ  
共ニセムトスル固ヨリ内國運ノ發展ニ須ツ戰後日  
尙淺ク庶政益更張ヲ要ス宜ク上下心ヲ一ニシ忠實  
業ニ服シ勤儉產ヲ治メ惟レ信惟レ義醇厚俗ヲ成シ  
華ヲ去リ實ニ就キ荒怠相誡メ自彊息マサルヘシ  
抑我カ神聖ナル祖宗ノ遺訓ト我カ光輝アル國史ノ

成跡トハ炳トシテ日星ノ如シ寔ニ克ク恪守シ淬礪  
ノ誠ヲ輸サハ國運發展ノ本近ク斯ニ在リ朕ハ方今  
ノ世局ニ處シ我カ忠良ナル臣民ノ協翼ニ倚藉シテ  
維新ノ皇猷ヲ恢弘シ祖宗ノ威德ヲ對揚セムコトヲ  
庶幾フ爾臣民其レ克ク朕カ旨ヲ體セヨ

御名御璽

明治四十一年十月十三日

日露大戦



國民精神作興ニ關スル詔書

朕惟フニ國家興隆ノ本ハ國民精神ノ剛健ニ在リ之ヲ涵養シ之ヲ振作シテ以テ國本ヲ固クセサルヘカラス是ヲ以テ先帝意ヲ教育ニ留メサセラレ國體ニ基キ淵源ニ遡リ皇祖皇宗ノ遺訓ヲ掲ケテ其ノ大綱ヲ昭示シタマヒ後又臣民ニ詔シテ忠實勤儉ヲ勸メ信義ノ訓ヲ申ネテ荒怠ノ誠ヲ垂レタマヘリ是レ皆道德ヲ尊重シテ國民精神ヲ涵養振作スル所以ノ洪謨ニ非サルナシ爾來趨向一定シテ效果大ニ著レ以テ國家ノ興隆ヲ致セリ朕即位以來夙夜兢兢トシテ

常ニ紹述ヲ思ヒシニ俄ニ災變ニ遭ヒテ憂悚交至レリ

輓近學術益開ケ人智日ニ進ム然レトモ浮華放縱ノ習漸ク萌シ輕佻詭激ノ風モ亦生ス今ニ及ヒテ時弊ヲ革メスムハ或ハ前緒ヲ失墜セムコトヲ恐ル況ヤ今次ノ災禍甚タ大ニシテ文化ノ紹復國力ノ振興ハ皆國民ノ精神ニ待ツチャ是レ實ニ上下協戮振作更張ノ時ナリ振作更張ノ道ハ他ナン先帝ノ聖訓ニ恪遵シテ其ノ實效ヲ舉クルニ在ルノミ宜ク教育ノ淵源ヲ崇ヒテ智德ノ竝進ヲ努メ綱紀ヲ肅正シ風俗ヲ匡勵シ浮華放縱ヲ斥ケテ質實剛健ニ趨キ輕佻詭激



ヲ矯メテ醇厚中正ニ歸シ人倫ヲ明ニシテ親和ヲ致シ公德ヲ守リテ秩序ヲ保チ責任ヲ重シ節制ヲ尙ヒ忠孝義勇ノ美ヲ揚ケ博愛共存ノ誼ヲ篤クシ入りテハ恭儉勤敏業ニ服シ産ヲ治メ出テテハ一己ノ利害ニ偏セスシテ力ヲ公益世務ニ竭シ以テ國家ノ興隆ト民族ノ安榮社會ノ福祉トヲ圖ルヘシ朕ハ臣民ノ協翼ニ頼リテ彌國本ヲ固クシ以テ大業ヲ恢弘セムコトヲ冀フ爾臣民其レ之ヲ勉メヨ

御名 御璽  
攝政名

大正十二年十一月十日

勅語 (昭和元年十二月二十八日)

朕皇祖皇宗ノ威靈ニ頼リ萬世一系ノ皇位ヲ繼承シ帝國統治ノ大權ヲ總攬シ以テ踐祚ノ式ヲ行ヘリ舊章ニ率由シ先德ヲ聿修シ祖宗ノ遺緒ヲ墜ス無カラシコトヲ庶幾フ  
惟フニ皇祖考叡聖文武ノ資ヲ以テ天業ヲ恢弘シ内文教ヲ敷キ外武功ヲ耀カシ千載不磨ノ憲章ヲ頒チ萬邦無比ノ國體ヲ鞏クセリ皇考夙ニ心ヲ養正ニ宅キ廼チ志ヲ繼明ニ尙クス不幸中道ニシテ聖體ノ不豫ナル朕儲貳ヲ以テ大政ヲ攝ス遽ニ登遐ニ遭ヒテ



哀痛極リ罔シ但皇位ハ一日モ之ヲ曠クスヘカラス  
萬機ハ一日モ之ヲ廢スヘカラス哀ヲ銜ミ痛ヲ懷キ  
以テ大統ヲ嗣ケリ朕ノ寡薄ナル唯兢業トシテ負荷  
ノ重キニ任ヘサラシコトヲ之レ懼ル  
輓近世態漸ク以テ推移シ思想ハ動モスレハ趣舍相  
異ナルアリ經濟ハ時ニ利害同シカラサルアリ此レ  
宜ク眼ヲ國家ノ大局ニ著ケ舉國一體共存共榮ヲ之  
レ圖リ國本ニ不拔ニ培ヒ民族ヲ無疆ニ蕃クシ以テ  
維新ノ宏謨ヲ顯揚センコトヲ懋ムヘシ  
今ヤ世局ハ正ニ會通ノ運ニ際シ人文ハ恰モ更張ノ  
期ニ膺ル則チ我國ノ國是ハ日ニ進ムニ在リ日ニ新

ニスルニ在リ而シテ博ク中外ノ史ニ徵シ審ニ得失  
ノ迹ニ鑒ミ進ムヤ其ノ序ニ循ヒ新ニスルヤ其ノ中  
ヲ執ル是レ深ク心ヲ用フヘキ所ナリ  
夫レ浮華ヲ斥ケ質實ヲ尙ヒ模擬ヲ戒メ創造ヲ勗メ  
日進以テ會通ノ運ニ乘シ日新以テ更張ノ期ヲ啓キ  
人心惟レ同シク民風惟レ和シ汎ク一視同仁ノ化ヲ  
宣ヘ永ク四海同胞ノ誼ヲ敦クセンコト是レ朕カ軫  
念最モ切ナル所ニシテ丕顯ナル皇祖考ノ遺訓ヲ明  
徵ニシ丕承ナル皇考ノ遺志ヲ繼述スル所以ノモノ  
實ニ此ニ存ス有司其レ克ク朕カ意ヲ體シ皇祖考暨  
ヒ皇考ニ效セシ所ヲ以テ朕カ躬ヲ匡弼シ朕カ事ヲ



獎順シ億兆臣民ト俱ニ天壤無窮ノ寶祚ヲ扶翼セヨ

心ト一人に見すべき

唯修と名の葉  
に見ゆ

新制 中學修身書 卷二

目次

第一課 發達進歩を樂まう …………… 一

一 成長發達は喜ばしい …………… 二

二 學業の進歩は樂しい …………… 三

三 登山の秘訣で修學の道を進まう …………… 四

四 學業に一刻の油斷なく日に新に日に進まう …………… 五

五 上級に進んだ責任 …………… 六

第二課 讀書の興味を養はう …………… 四

一 讀書の興味は知識慾から起る …………… 二

二 書籍は精神に糧を與へる …………… 三

三 讀物の選擇と讀書法に注意しよう …………… 四

四 不眞面目や不健全な雜誌小説に手を觸れまい …………… 五

第三課 高尚な趣味を養はう …………… 八



一人は天性美を好み醜を嫌ふ 二藝術は人心に偉大な感化を與へる 三趣味は人に氣品を添へ生活に慰安を與へる 四高尚な趣味は立派な人格に伴ふ 五日本趣味と製品

第四課 善行の愉快……………三七

一修身の教は人の善を好む天性を養つて生活を幸福に導く 二善い事を實行した心は愉快である 三責任を果せば愉快である 四無責任や怠惰は苦痛である 五善い事を實行する習慣を作らう

第五課 衛生……………三七

一衛生と治療 二生活の規律と身體の鍛鍊 三修養の爲にも生活の爲にも衛生は大切である 四公衆の爲に衛生を守らう 五國民全體の爲に衛生を守らう

第六課 勤勞と産業……………三三

一勤勞は業務の生命である 二産業は國力の基礎である 三自ら勤勞し

て勤勞の價値を知らう 四勤勞は人格を作る 五勤勞する人とならう

第七課 勞力の經濟を考へよう……………三七

一文化が進めば勞力の經濟が必要になる 二無駄な勞力は避けよう 三綿密に注意しよう 四豫め計畫を立て仕事の順序を考へよう 五常に整頓に心懸けよう

第八課 生まれつきの長所を伸さう……………三三

一生まれつきは十人十色に違ふ 二生まれつきの個性には修正が出来る 三身體の生まれつきを氣にすまい 四秀才に誇らず鈍才に失望すまい 五天稟の氣質を練磨しよう

第九課 他人の長所を學ばう……………三七

一他人の長所は我が長所を喚び起す 二良友に交つて善い感化を受けよう 三他人の短所の爲に我が心を害ふまい 四謙遜して他人の長所を學ばう 五寛い度量を以て他人の長所を學ばう



第十課 油断 大敵……………三

- 一油断は生活の大敵である
- 二油断は健康の大敵である
- 三油断は勉強の大敵である
- 四油断は修養の大敵である
- 五油断は仕事の大敵である
- 六油断の隙間を作るまい

第十一課 機会を捕へよう……………七

- 一學習の機会は何處にもある
- 二運動の機会
- 三勉強の機会
- 四修養の機会
- 五素早く機会を捕へよう
- 六機会を捕へた人々

第十二課 悲観すまい……………五

- 一悲観者に成功者なし
- 二不成績に失望すまい
- 三生まれつきの短所を悲観すまい
- 四失策失敗に失望すまい
- 五失敗や不運の試練を味はう

第十三課 心の鏡……………五

- 一良心は真澄の鏡のやうである
- 二鏡の曇りを拭はう
- 三偽りのない我が心の姿を見よう
- 四恥を知れば恥は無くなる

第十四課 心を晴やかに有たう……………六

- 一修身の教を守れば心は晴やかである
- 二暗く曇つた心は心身の發達を妨げる
- 三晴やかな心は益・晴やかな心を生む
- 四笑ふ門には福來る

第十五課 孝の心……………六

- 一孝の心は親心に養はれる
- 二感恩
- 三従順
- 四安意
- 五孝養
- 六孝行を重んずるは我が國の美風である

第十六課 家の爲に盡さう……………六

- 一家庭の和樂
- 二子供の徳性は家庭和樂の中に發芽する
- 三我が國の家は小さい國である
- 四家の繁榮を圖らう
- 五家族の團結を固くしよう

第十七課 あてになる人……………七

- 一あてになる人
- 二あてになる人は約束を履行し又よく祕密を守る
- 三あてになる人は信義を重んずる
- 四あてになる人は責任を盡す
- 五あてになる人は誠實である
- 六頼み甲斐ある人々

C



第十八課 慕はれる人……………八二

- 一慕はれる人と嫌はれる人
- 二慕はれる人には好き嫌ひの心が無い
- 三慕はれる人には思ひやりの心が深い
- 四平和の理想
- 五慕はれる人々

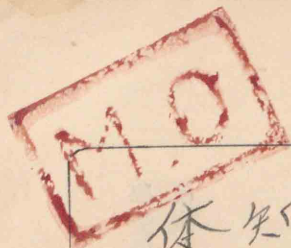
第十九課 社會奉仕……………八五

- 一公益を廣め世務を開かう
- 二我等は社會から大きな債務を負うてゐる
- 三社會奉仕の道
- 四我が國民の社會奉仕の精神はまだ不十分である
- 五社會奉仕の人々

第二十課 國史の誇……………九三

- 一國史の意義
- 二建國の大本
- 三建國の規模
- 四列聖の御盛徳
- 五列聖の御盛業
- 六益、國體の精華を發揚せよ

目次終



徳知体

持入の心  
 至はより  
 此とある  
 りは意  
 金ありけり  
 成長發達は  
 喜ばしい

### 新制 中學修身書 卷二

文學博士 野田義夫著

#### 第一課 發達進歩を樂まう

一 立ち始めた幼兒は、喜んで立ち、少しでも歩み習へば、勇んで歩む。眞似も遊びも、獨りで出来ることは何でも喜んで爲たがる。子供は段々成長するにつれて、益、自由に身體を活動することを喜ぶ。これは、つまり自分の成人を喜ぶのである。我等も、一年々々と、ずん／＼成長發達することとは、何より喜ばしい。

第一課 發達進歩を樂まう



學業の進歩は楽しい

登山の秘訣  
で修學の道を進まう

二 我等は、入學してから一年経つ間に、身長も伸び、體重も増し、進んだ學業にも馴れきつて、最早名實共に全く小學生の風を脱した。入學當時苦心して學んだ學科を復習し、丹精して描いた圖畫を眺める時には、我ながら學力がついたことに驚く。新學年の教科書を手にして、一年間の學業の進歩を振り返つて見れば、何とも言へず愉快ではないか。

三 我等の修學は、譬へば高山に登るやうである。高山は、どうしても、一足跳びには登られぬ。經驗のない登山者には、失敗が多い。人に負けまいと、あせり過ぎて、早く疲れる人もある。うつかり横道に入つて連にはぐれる人も出来る。登山の秘訣は麓から頂上まで、あせらず、せかず、徐々

學業に一刻の油断なく日に新に日に進まう

上級に進んだ責任

に而かも堅固に、一歩々々を踏みしめつゝ、進んで行くことである。山が高ければ高い程、登るのに骨が折れる。學業も之と同じ、やうに、其の程度が進む程、大きな努力が要る。我等は、よく此の道理を辨へて、學業の進歩を樂みつゝ、撓ま

ず屈せず、一歩々々、修學の道を進まう。

四 少し油断をすれば、我等の學業は、忽ち進歩が止まる許りでなく、却つて退歩する。これは丁度、登山の中途に休息して、登ることを忘れ、又は折角登つた坂から滑り落ちるのと變らぬ。我等は、どの學科にもよく氣をつけて、一刻の油断もなく、日に新に日に進まう。

五 我等は、今度首尾よく進級し、新入の人達を迎へて、最



下級生から上級生になつた。新入の人達も、丁度我等が去年入學した時と同じ心持であらう。我等は、一年でも上級であれば、又それだけの責任がつく。我等は、上級生として恥づかしくないやうに、皆仲よく心を協せて、益級の氣風をよくし、互に勵み合ひ、助け合ひ、足並を揃へて、進んで行かう。

第二課 讀書の興味を養はう

一 人間には、天性、知識慾といふものが有つて、生活に必要な新知識を進んで得ようとする。小學校の子供でも、少し讀書の力がつけば、自然に讀物を欲しがらる。書物を愛讀するやうになれば、遂には讀書せずに居られなくなる。こ

讀書の興味は知識慾から起る

おめよ  
あこば  
へる

書籍は精神に糧を與へる

れを讀書の興味と名づける。讀書の興味は多讀を促して、讀書力を増進する。

二 書籍は知識の寶庫である。世界の人類のあらゆる知識は、其の粹を集めて、悉く書籍の中に收められてある。我等が得たいと思ふ知識は、何一つとして書籍に具はつてゐないものはない。三度の食事が身體の營養となるやうに、書籍は、我等の精神の發達に必要な糧を、望み通りに與へて呉れる。そして、夫はやがて我等の知能を啓發し、且、徳性を涵養する。

三 書籍の種類は、素より千差萬別で、其の内容の價值も決して一樣でない。就中、良書は我等の先生ともなり、益友

讀書の選擇と讀書法に注意しよう



ともなる。殊に、東西の聖賢の經書や、古今の文豪の名著は、偉大な感化を與へるから、幾度となく繰返して熟讀玩味するがよい。我等は自分の藏書は勿論、生徒文庫や、圖書館を利用して、理解の程度に適した有益な書籍を選択して讀むがよい。我等は讀物の選擇に注意すると共に、讀書法にも亦よく氣をつけよう。濫りに多く讀んだからとて、必ずしも有益ではない。十冊の雜書を粗讀するよりも、一冊の良書を精讀する方がよい。手當り次第に粗讀するのは、時間と勞力の空費になる。心を落ちつけて精讀するのが此の上もない良法である。

四 青年は、多く面白い雜誌・小説を讀むことを好むが、我

不眞面目や  
不健全な雜  
誌小説に手  
を觸れまい

GOLD STAR

等は先生や父母の注意を受ける迄もなく、いかゞはしい雜誌や不眞面目な小説などに手を觸れまい。娛樂の爲や、惡い目的の爲に書いた讀物には、殊更に氣をつけよう。健全な小説は、優美な情操を養ひ、且、常識を豊富にするが、不道德の題材を採つて、醜い場面をありの儘、微細に寫した文學などは、極めて有害である。探偵小説や、冒險小説を好んで讀めば、追々とそれにかぶれて、性質が荒くなり、操行も亂暴になる。不健全な小説を耽讀すると、勝手な想像を逞しうし、我が儘な空想にあこがれ、自然に勉強も不眞面目になり、修養を怠り、遂には不良少年にも墮落する。又規則正しい運動をせず、不健全な讀書に熱中して、度々夜更しなどをすれ



ば遂に健康を害し神經衰弱にも罹る。

### 第三課 高尚な趣味を養はう

人は天性美を好み醜を嫌ふ

一 人が天性美を好み醜を嫌ふ心を美感と名づける。幼い子供でも鮮やかな色彩の玩具や著物などを喜ぶのは、此の美感が有る爲である。大人が四季それらの花鳥風月を樂み、山水風景を愛するのも、自然の美が、人の美感を満足して、高尚な快感を與へるからである。

藝術は人心に偉大な感化を與へる

二 自然美は興奮した感情を鎮め、疲勞した精神に元氣を恢復させる不思議な力を有つてゐるが、自然美に象つて高尚優美な理想を表現した人工の藝術は、それよりも一層

深い感化を人心に與へる。藝術は普通建築・彫刻・繪畫・音樂・文藝の五種に分ち、其の創作に従事する人を藝術家と名づける。立派な宮殿や、寺院の中に入れば、我を忘れて一種莊嚴の感に打たれる。又美術展覽會や、博物館に入つて彫刻や繪畫の名作に對し、又は音樂會で美妙的な演奏を聽けば、世俗の利害や私慾を打忘れ、うつとりして無我無慾の心になる。高尚な歌劇や演劇を見ても眼前の醜い世間を離れて美しい理想の別天地に遊ぶ。詩や小説を讀んでも、同じく美しい理想の世界にさまよふ。此れ等の藝術は、又いづれも美妙的な快感を與へて、人間の感情を洗ひ清め、且又道德上有益な教訓を與へ、宗教上の信仰をも篤くするものがある。



趣味は人に  
氣品を添へ  
生活に慰安  
を與へる

る。藝術の美は、鮮かて誰にもはつきりと早分りするから、書物や講話などの及ばぬ偉大な感化を人心に與へる。

三 自然美を感じる力を美感と言ひ、藝術美を味ふ力を趣味と名づける。趣味は直接に生活の資にはならぬが、疲れた精神に娛樂慰安を與へ、緊張した心にくつろいだ餘裕を與へるから趣味の有る人は、何となく人品が床しい。趣味の高い人を、上品とも氣品が高いとも言ひ、趣味の低い人を、下品とも野卑とも、氣品がないとも言ふ。必ずしも建築・彫刻・繪畫・音樂・文藝の趣味に限らずとも、天性の美感を育て上げて、立居・振舞・言葉づかひ、其の他何でも之を美化すればやがて高尚な趣味となる。課業や業務の餘暇に、高尚優雅

高尚な趣味  
は立派な人  
格に伴ふ

な餘技を選んで、心を慰めるのも、同じく趣味と言へる。

四 人は天性美を好むやうに、又善をも好むから、自然に美と善とを一致させようとする。我等が善行を美しく思ひ、悪行を醜く感ずるのは、其の爲である。故に趣味の高い人は、自然に野卑な慾望を抑へ、趣味の低い人は、俗悪な誘惑に陥る。高尚な趣味を養へば、感情も純潔になり、立居・振舞や言葉遣も、自ら上品になる。高尚な趣味は、斯くの如く人格の修養を助ける。

五 我等日本人は、山水秀麗、風光明媚の天地に成長して、自然の美を愛好する心が強い。随つて、我が國には、古來特有の日本趣味が發達した。純日本趣味は、日本美術のみな

日本趣味と  
製品



らず、家屋・庭園・盆栽・插花・衣服等の上にも、明かに現れてゐる。我が國では昔から、片田舎の山人・里人までが、三十一文字の歌詠む道を心得、殺伐な武器や武具にも、床しい意匠が施されてゐる。國民の趣味は、藝術品の創作のみならず、工藝品其の他の製品の上にも、目立つて現れ、其の國の海外貿易に重要な關係を有つ。我等は祖先のみやびやかな心を承けついで、高尚な趣味を養はう。

#### 第四課 善行の愉快

一 學校の修身を窮屈な學科と思ひ、堅苦しく其の教通りに實行する事を迷惑と考へ、甚しきは一々窮屈な道徳に

修身の教は  
人の善を好  
む天性を養  
つて生活を  
幸福に導く

縛られては、到底世の中に立つて行かれぬとまでに思つてゐる人もあるやうである。此れ等は孰れも、淺はかな誤解に過ぎぬ。道徳の本領は、決して人に窮屈な思ひをさせ、又は迷惑をかける事ではない。全く其の正反對に、日常の生活に正しい道を示し、勤勞を勧め、業務に勵ませて、心を晴やかにし、一生を幸福に導く所に、道徳の尊い價值がある。眞に修身の教を會得して、進んで之を守る人は、身體も精神も素直に伸びて、楽しく一生を送る。絶えず心身を苦めて、慘めな生活を送らねばならぬ人は、多くは修身の心懸けが悪く、人の道に背いた酬いを受けてゐる。人は天性善を好み、惡を憎む。修身の教は、本來此の天性に基づいて、善い事を



實行するやうに獎勵する。修身を好む人は、善を爲すことを樂みつゝ、立派な人格者となり、其の生活は益、幸福に向ふ。之に反して、修身を好まぬ人は、人の天性に背いて次第に善に遠ざかり、自分の人柄を下げて世の信用を失ひ、遂に業務に失敗して、一生の不幸を招く。

二 登山の仲間に加はり、喘ぎ汗ばみながらも、頂上に達して晴ばれとした四方の景色を見渡した時の嬉しさは、何とも言はれぬ。登山嫌ひの人が、始めて登山して一遍に登山好きになつた例は少くない。運動嫌ひの人が、友達に勧められて、しぶくテニスを始め、上手になるにつけて段段熱心になり、後には立派な選手にまでなつた人がある。早

善い事を實行した心は愉快である

起きは、一寸出来にくいが、思ひ切つて決行すれば、これほど氣持のよいものはない。何事に限らず善いと思つた事を進んで、直ぐに實行すれば、晴ばれとした愉快な心になる。之に反して、同じ善い事も、いや／＼ながら實行すれば、それだけ心の愉快も少く、其の行ひの値打も低い。進んで善い事を實行すれば、自分には快く、人には悦ばれる。人に悦ばれることは、又此の上もない喜びである。かくの如く、善い事の實行には二重の愉快が伴ふ。善行の愉快は、此の上もなく徳性を涵養する。

三 書くべき手紙を書かないで、幾つもためて置く事は、自分で苦痛の種を作る。氣懸りになつてゐた手紙を書い

責任を果せば愉快である



無責任や怠惰は苦痛である

てしまへば、借りた物を返した氣持がする。人から頼まれた大事な仕事を滞りなくすませば、重荷を卸したやうである。まして多數の人の責任を一身に引受けて、首尾よく之を果した時は、競技の選手が、試合に勝つたやうな喜びを感じずる。人は生きてゐる間は、何か責任を負うてゐる。我等は、何時も進んで首尾よく責任を果すことに心掛けよう。

四 豫習復習を怠つて、教場に出た時の心持はどうであらう。言ひつけられた家の用事をせずに叱られたり、口答へをする心持はどうであらう。かゝる時に誰しも言ひ知れぬ不安の念が起るのは、生まれついた尊い徳性が内心に閃くからである。善を好み、惡を憎む心は、人の天性である。

善い事を實行する習慣を作らう

此の天賦の徳性を失はぬ間は、無責任や怠惰が堪へられぬ苦痛となつて、爲すべき事を實行しようと努力する。

五 一たび善い事を實行した愉快を味へば、次第に實行の習慣がついて、遂には善い事を知つて實行せぬことが苦痛となる。我等が毎日齒を磨くことや、入浴を止められぬのは、良い習慣の力である。善事實行の習慣は、益、善事の實行を促す。規律や秩序も、實行の習慣がつけば、到底不規律や無秩序の不愉快に堪へられぬ。我等はしみじみと、善事實行の愉快を味つて、實行の習慣を作り上げよう。

第五課 衛生



衛生と治療

一 生きて行くことは、生物自然の要求であり、且其の本領である。動物は、誰が教へるともなく、唯天賦の本能の力のみで、食物を採り、危険を避けて、其の生命を完うする。怪我をして、病氣をしても、其の成行は自然に任せる。併し人間には、動物と違ひ、優れた智慧が具はつてゐるので、自然の成行以上に、生命を安全にする方法を考へる。身體を健康にして、病氣を豫防する爲には、衛生學が起り、病氣を治療する爲には、醫學が發達して、其の研究は絶えず進歩してゐる。衛生學や、醫學の恩恵で、體質の弱いものが強くなり、不治と思つた病氣が癒り、恐ろしい傳染病を豫防する道も開けた。衛生と治療とが並び進む國では、一般國民の死亡率

生活の規律  
と身體の鍛  
鍊

が次第に低下する。

二 衛生の要領は、生活の規律と身體の鍛鍊の二つにまとまる。姿勢を正しくし、身體衣服住居を清潔にし、起臥飲食仕事休息睡眠等を適度に、且規則正しくし、新鮮な空氣を呼吸し、よく日光にあたる等は、生活の規律を守る事である。殊に青年に取つては、飲食物に注意し、活動と休養とを程よくし、早寢早起、深呼吸等の良習慣を作ることが大切である。規律のない生活は、身體の健全な發育を妨げる。體操競技、登山、遠足などで、筋肉を運動し、又冷水浴や冷水摩擦で、皮膚を強くするのは、身體の鍛鍊である。生活の規律は、身體の健康を保護して、病氣を防ぎ、身體の鍛鍊は、體力と元氣を増



進して、寒暑や困苦缺乏に耐へる力を養ふ。規律と鍛錬の二つが併行して、<sup>ヘイタク</sup>身體が健全に發達する。青年時代は、發育最盛の時期であるから、生活の規律も身體の鍛錬も共に、其の價値が人の一生中で最も多い。

三 身體の衛生は、修養の上にも、生活の上にも、大切である。生活の規律は、やがて精神上にも善い習慣を作り、身體の鍛錬は、意志を鞏固にし、快活剛健の氣象を養ふ。身體が強健であれば、生活力が充實して、元氣よく楽しく仕事が出来、愉快に、且、圓滑に、人と交ることが出来る。衛生は、我等の一生を幸福にする基礎を作る。

四 我等は、自分の爲に衛生を守ると共に、公衆の爲にも

修養の爲にも生活の爲にも衛生は大切である

公衆の爲に

衛生を守らう

衛生を守らう。公衆衛生の爲には、國家や、市町村は勿論、諸種の團體で、多額の費用をかけて、用意周到の施設をしてゐるが、我等は一個人としても、亦之に協力することを忘れてはならぬ。一個人の衛生上の不注意や、怠慢から、多數の公衆に大きな迷惑や、損害をかけることは、許すべからざる罪悪である。我等はコレラ、赤痢、腸チフス、ペストのやうな、急性傳染病は勿論、結核、トラホームのやうな、慢性傳染病をも豫防せねばならぬが、若し不幸にして自ら之に罹つた時は、他人に傳染させぬやうに、精々注意しよう。十二指腸蟲、蛔蟲、條蟲のやうな寄生蟲も、極力其の驅除に努めよう。要するに、病毒は人類共同の敵であるから、我等は一致協力して



國民全體の爲に衛生を守らう

之を退治しよう。

五 我等の健康は、自分の爲に大切であるやうに、國家社會の爲にも極めて尊い。身體が病弱であれば、自分の爲には勿論、國家社會の爲に役に立つ仕事が出来ぬ。我が國では、未成年者の喫煙・飲酒を國法で禁じてあるが、これには深い理由がある。我等青年は、特によく其の精神を理解して、學校の監督禁止を待たず、自發的に節制して、嚴格に此の禁令を守らう。尙ほ我等の生命は、父母から受けてゐるが、父母は又幾代と數へられぬ祖先から生命を承け繼いでゐる。我等の生命は、遠い〜祖先の生命の延長である。此の生命は、又永久に我等の子孫に傳はつて行く。我等は、祖先か

ら無窮の生命を傳へてゐる許りではなく、將來の子孫に對して之を預つてゐる。随つて將來の國民の健康は、將來の父親たるべき我等男子の健康によることが多い。我等の生命は、實に自己一人の生命であるばかりでなく、又大和民族の大生命の一部分である。我等はよく此の道理を理解して、國民全體の爲に嚴格に衛生の法則を守らう。

### 第六課 勤勞と産業

一 人は生活する爲に何か業務を有たねばならぬ。業務は公私孰れであつても勤勞なしに出来る仕事は一つもない。自ら勤勞して獨立生活を營むことは人間の本分である。

勤勞は業務の生命である



ある。社會に産業其の他の業務が成り立ち、時勢と共に益々進歩發達するのは、全く勤勞の力である。人が一般に勤勞を賤み、仕事を嫌ふやうになれば、農工商の産業は衰へ、生活は困難に陥る。産業の盛な國には、必ず勤勞を尊ぶ美風がある。

二 國力は主として産業によつて養はれる。産業が振はず、財力の乏しい國は、財政の基礎が危ふく、思はしい活動が出来ぬ。産業に従事するものは、自國に對して重大な任務を有つてゐる。而かも此の任務を盡すには、勤勞といふことが最も大切である。

三 産業も、國力も、勤勞から生み出されるが、自ら筋骨を

産業は國力の基礎である

自ら勤勞して勤勞の價値を知らう

勤勞は人格を作る

勞して、仕事をして見ぬ人には、其の本當の意味が、解らぬ。農業に従事せぬ人は、毎日食べてゐる米飯が粒々、辛苦より成ることを氣にかけぬ。茶碗や箸を造つた事のない人は、之を製作する手数を何とも思はぬ。まして、我が手に入るまでの商人の仕事に無頓著である。農産物でも、工業品でも、自ら勤勞し、自分に生産して見た時に、始めて其の價値がしみとくと解る。我等は自ら勤勞して、製品の價値を理解すると共に、廣く他人の勤勞の價値を知らう。

四 人は仕事に勤勞する時に、心身の全力を注ぐ。随つて自ら勤勞して仕事をすれば、よく自分の實力を覺るから、みだりに慢心を起し、又は空想に走る恐れがない。勤勞は、



勤勞する人  
とならう

人を著實に導き、益、實力を養成させる。口の先や書物の上の知識許りでは、仕事が出来ぬ。勤勞には、誠實も要れば、努力、工夫も要る。如何なる業務であつても、人は勤勞する間に人格を鍛鍊する。随つて、仕事を見れば、大概其の人格が窺ひ知られる。

五 不勞所得に對する非難はあつても、勤勞所得に對しては、何等異議はない。職業もなく仕事もせぬ人は、縦へ親讓りの財産があつても、國民としても、人間としても、一人前ではない。勤勞せぬ人は、勤勞する人に對して恥づかしい。我等は、よく勤勞の價値を理解し、一定の業務を有つて、自ら勤勞する人とならう。

第七學期

第七課 勞力の經濟を考へよう

文化が進めば勞力の經濟が必要になる

勤く身は  
は人のあふ  
勤かざる  
ものほふ  
あへがらす

一 人間は生活する爲に、仕事をせねばならぬ。仕事には身體と精神の勞力が要る。社會の文化が進むにつれて、我等の仕事は、段々に増して行く。併し、我等の心身の勞力には限りがあるから、無駄な勞力を省いて最小限の勞力を以て、最大限の仕事をする工夫が必要となる。これが勞力の經濟、即ち勞力の節約利用である。社會の文化も、事業も、悉く勞力によつて生み出される。今日は、勞働は神聖なりと、まで言はれてゐる時代であるから、我等は、必要の仕事には決して勞力を惜んではならぬ。唯勞力の經濟を考へて



無駄な勞力は避けよう

之を最も有効にすることが極めて大切である。

二 一日の仕事を終へて靜かに反省して見れば、誰しも無駄な勞力の多かつた事に驚くであらう。急いで家を出る時に、忘れ物をして、途中から引き返したり、道順が悪くて、同じ道を幾度も通ることは、誰にも有りがちである。一事を終らぬ中に、それを中止して他の事に手を出したり、社會に必要な事業や、最初から成功の見込のない事業を企てたりすること等は、いづれも無駄な勞力である。我等は何事をするにも、豫め篤と其の道筋を考へて、勞力が無駄にならぬやうにしよう。「路を誤つてゐる時は何程走るも益なし」といふ西諺がある。

綿密に注意しよう

三 勞力の經濟には綿密な注意が必要である。一寸の

不注意や、粗漏そろうから折角の勞力も無駄になる。今少しで描かいてしまふ圖畫も、一寸の仕損じて、初から描き直さねばならぬ。最後の粗相そまで苦心の製作品をも無駄にする。忘れ物も、往き損も、無駄骨折りも、皆僅かの不注意から起る。

豫め計畫を立て仕事の順序を考へよう

四 勞力の經濟には、豫め計畫を立て、よく仕事の順序

を考へて置くことが大切である。計畫も立てず、順序も考へず、思ひつき次第、手當り次第に仕事をすれば、勞力の無駄が出来て、とても用事がきまりよく辨じられない。陸海軍の訓練や、機械工場、銀行、會社、大商店の仕事が、秩序正しく進行するのは、一定の計畫に従つて、勞力の無駄が少しもない



常に整頓に  
心懸けよう

やうに、仕事の順序が豫め考へてあるからである。  
五 労力の經濟には、平素の整頓が大切である。仕事に  
必要な用具は、平素それ〴〵置き場所を定めて置かねば、入  
用の時に無駄な労力が費える。我等の書籍・學用品・作業用  
具は勿論、著物・携帶品なども、整頓が悪ければ、探すのに無用  
の手數がかゝる。軍隊や軍艦が一令の下に、何時でも出動  
準備が出来るのは、武器・彈藥から、被服・糧秣に至るまで、秩序  
井然として一絲亂れぬ整頓が、平素より行届いてゐるから  
である。我等の日常生活も、品物の整頓が平素より行き届  
いてゐれば、何の仕事も敏活にはかどる。

第八課 生まれつきの長所を伸さう

生まれつき  
は十人十色  
に違ふ

一 我等は、身體の上から見ても、精神の上から見ても、人  
間として有つべき性質や能力は、萬人一様に有つて生まれ  
ついてゐる。これが人間の共通性である。併し、一々の性  
質や能力を調べて見れば、其の人々によつて、恵まれてゐ  
る程度が、一様でない。此の天恵の相違を、個性と名づける。  
個性は、一人々々の特色を作る根本となる。これは天から  
授かつた持前であつて、人力できまるものでないから、之を  
其の人の天分とも名づける。容貌・身長・體質等、身體のあら  
ゆる性質に、生まれつきの相違があるやうに、精神の性質に



も、夫れく長所・短所があつて、十人十色の相違がある。生まれつきの相違は、例へば植木の苗の種類が、最初から色々違ふやうなものである。我等は、勝手に生まれかはその出来ぬから、有つて生まれついた長所を、十分に伸ばすことに努力しよう。

二 手入れの仕方、植木の苗の育ちが違ふやうに、人間も生まれつきより育ちが第一である。生まれつきの個性は遺傳できまるものであつて、それが根本となつて、生後色の事情によつて、段々と、發達もすれば、害はれもする。子供の時には、あまり分らぬが、青年時代になれば、他人の長所・短所に氣がつくやうに、自分の個性にも目醒めて來る。生

生まれつきの個性には修正が出来る

まれつきの個性はなか／＼根強いものではあるが、決して少しも變らぬやうに、初から固まつたものではない。我等は、其の發達の途中で、伸びるやうに助けることも出来れば、伸びぬやうに抑へることも出来る。それには境遇の影響もあれば、教育の力もあるが、自分の努力によつても相當に修養の効果を收めることが出来る。我等は自分の短所・缺點に氣がついても、早まつて失望落膽せず、好ましからぬ性質は、之を抑へ、長所・美點と思ふ性質は、之を素直に伸ばすやうに、絶えず修養に努力しよう。

三 身長・體格・容貌は兎も角、體力や體質は鍛錬の仕方、著しく變る。生まれつき強壯の人が、生活の規律を守り、身

身體の生まれつきを氣にすまい



體の鍛鍊を積んで、益強壯になるのは、此の上もない幸福ではなからうか。貝原益軒や伴信友のやうに、生來虛弱で困つた人が、根氣のよい攝生によつて長壽を保つた例は少くない。青年には、生まれつきの容貌風采を氣にする人もあるが、身體が健康で熱心に學問や修養を積めば、表情や態度に自ら品位が備はつて、立派に見える。生まれつきの容貌風采よりも、修養で磨き上げた人格の方が遙かに尊い。

四 「梅檀は二葉より香ばし」といふ俚諺の通り、生まれつき智能が優れ、學業の進歩も早く、あまり努力せずとも、優等の成績を取る人は、仕合せである。併し、才能を恃んで學業を怠る人は、何時となく學科が出来なくなる。中學校に入

秀才に誇らず鈍才に失望すまい

學の出来た人は、智能が普通以上に優れてゐるから、眞面目に勉強さへすれば、どの學科も相當に出来ぬわけではない。「天才は努力なり」と言はれる程、努力は大切である。努力しないで成功を夢みるのは、愚の至りである。我等は學校の成績が優等だからとて、油斷することも、成績が悪いからとて、失望落膽するのも同じく禁物である。我等は秀才に誇らず、又決して鈍才にも卑下すまい。

五 徳性上の生まれつきの違ひを、天稟の氣質と名づける。誰にも慕はれるやうな、優しい氣質の人は、格別仕合せである。こんな人でも、自敬自重して熱心に修養を積めば、人格は益立派になる。併し、自分にも困るほどの短所を有

天稟の氣質を練磨しよ



つて生まれついた人でも、同じく自敬自重して、修養に努力すれば、必ず其の效能が現れる。縦へ金剛石でも、何時までも磨かずに捨て、置けば、知らぬ人には光のない岩石かと思はれるが、廉價な生鐵であつても、名工が精神をこめて鍛錬すれば、正宗の利刀にもなるではないか。折角修養に志しても、我が氣質の變化し難いことに失望して、中途で打棄て、はならぬ。我等は、如何なる氣質の奥にも、必ず尊い心が潜んでゐるといふ確信を失つてはならぬ。此の確信を以て熱心に修養を積めば、如何に短所の多い氣質も、次第に磨き上げられて、遂には尊い心の美しい光が、自然に人格の上に現れて来る。

### 第九課 他人の長所を學ばう

他人の長所  
は我が長所  
を喚び起す

一 困り切つてゐる時に、思ひがけない人に助けて貰ひ、苦み惱んでゐる時に、やさしい言葉でもかけて貰へば、其の親切が身にしみる。こんな親切には、感謝の情が心の底から湧き出て、自分にも出来る事なら、人に親切を盡さうと思ふ。又親孝行の美談に深く感動した時には、少しでも眞似をして見度いと思はぬ人はあるまい。これ等は皆他人の長所が、我等の胸の奥に潜んでゐる同じ美點を喚び起すのである。これを其の儘に捨て、置かず、よく氣をつけて、大事に育て上げて行けば、次第に發達して、遂に自分の長所と



良友に交つて善い感化を受けよう

なる。これが本當に他人の長所を學ぶ道である。

二 我等は、良い友達に交つてゐれば、いつも其の長所を見聞して、善い心を喚び起されて、善い方、善い方にと引き上げられる。かくして、良友から受ける善い感化には、想像の及ばぬ程尊い價值がある。良友の長所を學ぶ人は、知らず識らずの間に、人格の修養が出来てゐるが、良友に交らず、友達から仲間はずれにされるやうな人は、思はず、生まれつき素直な徳性が害はれて、とかく偏屈固陋になる。

他人の短所の爲に我が心を害ふまい

三 人に助けられた事もなく、慰められた事もなく、却つて冷酷な言葉や、不親切な待遇に慣れた人は、何時の間にか生まれつきの優しい心を害はれて、人を怨み、世を詛ふ僻み

謙遜して他人の長所を學ぼう

の根性が強くなる。かやうな人は、嫉妬、邪推、憤怒、憎悪など、あらゆる短所を暴露する。「人の振り見て我が振り直せ」といふ俚諺がある。他人の短所を見て、自分の同じ短所を除くやうに心懸けるのは固より良い修養になるが、うつかりすれば、人の短所に感染して、我が素直な心を害ふ恐れがある。人の悪い振りを見て、我が悪い振りを直すよりも、人の善い振りを見て、我が悪い振りを直す方が遙かに容易く、且安全である。我等は出来る限り立派な人に接し、専ら人の長所を見習つて、我が短所を直す事に心懸け、世間の暗黒面には注意を向けず、成るべく悪い言行を見聞せぬがよい。

四 他人の長所を學ぶには、謙遜といふことが大切であ



る。自分の短所には少しも氣がつかず、長所許りを高く見過ぎて、遙かに自分に劣つた人たちに比べてゐれば、後には他人の長所が見えなくなり、若し見えれば、丸で仇敵のやうに妬む。これが慢心である。慢心は却つて自分の人格を引き下げる。「自ら賢いと思はぬ人が最も賢い。」謙遜の人は、自分の短所に敏感であつて、他人の長所を尊重して之を學ぼうとする心が強い。「下がる程藤の花は譽められ、實のほど稻穂の頭は下がる。」謙遜をして、我が人格の修養を助ける事はあつても、其の爲に品位を下げる事は決してない。

寛い度量を以て他人の

五 他人の長所を學ぶには、寛い度量が大切である。長

長所を學ぶ

所を有つた人にも、短所・缺點もあれば、過失もある。人の過失を咎め短所を指摘するやうな狭い心の人、人の長所を學ぶことは出来ぬ。縦へ他人に過失や短所はあつても、長所は長所として之を尊重するのが、寛い度量である。「良薬は口に苦い」やうに、他人の忠告は縦へ親切の友情から出てゐても、侮辱された氣がして、容易に耳に入らぬ。この狭い心に打ち勝ち、己の短所に氣づいて、素直に忠告を受け入れるのは、寛い心である。この心があれば、己の短所を去つて人の長所を學ぶ道が開ける。又何となく氣が合はず、蟲のすかぬ人から聞く非難・批評、又は立場の違ふ反對意見などを、善意を以て正當に理解するにも、同じ寛大な度量が要る。



良藥は苦し

苦言は、我が敵ではなくて、却つて親切な味方である。甘言・阿諛は、我が友ではなくて、寧ろ我を害ふ敵である。

### 第十課 油断大敵

油断は生活の大敵である

一 我等の生活には、色々の敵がつけ狙つてゐる。我等の心が、何時も緊張さへしてゐれば、敵に攻撃の隙を與へないが、一寸でも氣が弛めば、意外の大敵が、だしぬけに襲來して生命を危ふくし、幸福を奪ひ去る。病氣・失策・失敗・墮落等は、孰れも恐るべき生活の大敵である。而かも此等の大敵を招く原因は、其の場合によつて不注意・不謹慎・怠慢・偷安・自慢・輕侮等と様々に違ふが、要するに油断の一語に盡きる。

油断は健康の大敵である

油断はいつもうかとした所から生ずる。我等の生活には、随分油断が多いから、我等は、絶えず心を引きしめて、油断を警戒し、危険や不幸を未然に防がう。

二 元氣のよい活動は、成長發育を促し、身體を強壯にする援兵である。氣無性や不活潑は、成長發育を妨げ、身體を病弱にする大敵である。我等に油断があれば、援兵を取逃して、立所に大敵を引受ける。不規律な生活は健康の大敵である。生活の規律に油断があれば、意外の病氣に罹る。夏の傳染病や、冬の感冒には油断が多い。諸病の重圍に陥るのは、多く平素の油断が積み重なつた爲である。怪我や變死には、無論一時の油断が多い。



油斷は勉強の大敵である

不斷ノ  
努力  
アリカニ

進歩ヲ  
樂ミ  
進シテ  
キミヨク

油斷は修養の大敵である

力ニ  
力ニ  
力ニ  
力ニ

三 學業の進歩を樂み、眞面目に勉強すれば、生活の能率が増進して幸福の土臺が出来る。併し、油斷をすれば、何時の間にか、進歩の樂みを忘れて、不眞面目、無頓著、怠惰、慢心等の大敵が現れる。學科の豫習、復習を怠れば、學業はたちまち退步する。良成績に慢心が出れば、勉強に弛みが来る。古歌に

○ 手習は坂に車を押す如し、油斷をすれば跡へ戻るぞ。

四 善行の愉快を味つて熱心に修養すれば、天賦の徳性が素直に伸びて、人格は益、向上する。不熱心になり、不注意になり、不謹慎になれば、段々油斷が出来て善行の快味を忘れ、怠惰や無責任が平氣になり、遂には誘惑の大敵に襲はれ

油斷は仕事の大敵である

一事が  
萬事

ても氣がつかず、やがては、失敗や墮落を招いて、一身の破滅ともなる。古人は、終身善を爲せども一言にして、則ち之を敗る。」と、教へた。

五 喜んで仕事に精勵すれば、其の能率が増進して、直ちに生活を助ける。仕事の喜びを失へば、いつか油斷が出来て、過失、失敗、不規律等、いろく好ましからぬ生活の大敵を招く。汽車、汽船、電車、自動車、の衝突や、機械工場、炭坑の事故などは、多く従業員の思はぬ油斷から起る。綿密の注意を缺けば、成功に近い事業も、一朝にして失敗に終り、多年の奮闘によつて、築き上げた土臺も、忽ち潰れる。油斷があれば、仕事の能率が下がり、時間、品物、動力の無駄が出来る。仕事



油斷の隙間  
を作るまい

の失敗は、皆油斷から起る。

六 「始を慎むやうに、終を慎めば、失敗は無い。」併し、始の間はつゝましく大事を取つてゐても、次第に氣が弛めば、何時となしに油斷の隙間を生ずる。仕事の仕上りまぎはや、旅行の最終日に失策が多いのは、其の爲である。容易い小事と侮つて油斷し、馴れて得意な仕事と氣を許せば、意外な失敗を招く。火災・盜難・變死などは、多くこんな油斷から起る。何事も困難な大事と思ひ、馴れぬ不得手の仕事と用心すれば、決して油斷の隙間がない。萬事得るは難く、失ふは易い。成功は遅く、失敗は早い。「磯際で船を破る。」「泥棒を捕へて繩をなふ。」「得手物で仕損ずる。」「河童の川流れ。」「弘

法も筆の誤り。等は、孰れも油斷を戒めた、俚諺である。

### 第三學期

#### 第十一課 機會を捕へよう

學習の機會  
は何處にも  
ある

一 學校は、我等の學習に絶好の機會を與へる。併し、それは決して、學校許りに限らぬ。我等に心懸けさへあれば、學習の機會は、家庭にも、社會にも、自然界にも、到る處に限りなく存在する。我等を取り圍んでゐる自然界も、社會も、無言のうち、種々の事を我等に教へてゐるから、我等に取つて生きた書籍であり、大きな學校である。社會や、自然界から學んだ事は、家庭や、學校で學んだ事に劣らぬ價值がある。早くこれに氣がついて、學校・家庭以外に學習の機會を見出



運動の機會

す人は、夫れだけ學校教育を補つてゐる。

二 學校の體操や遊戯は、規則正しい運動の機會である。學校は此の外臨時に、遠足・登山・運動會などの機會をも與へる。時間割に運動のない日には、自ら進んで適當の運動をしよう。殊に、長期の休暇には、適度の運動を怠れば、健康を損じ、身體の發達を妨げる。平日でも、徒歩通學や、家事・家業の手傳などもよい運動になる。

勉強の機會

三 我等の勉強の機會は、學校の課業と、家で豫習・復習をする時許りに限らぬ。かりそめの人の談話にも耳を傾け、又は人に不審ふしんを聞くことも、思はぬ知識を増す。家庭や、學校でひま／＼を利用すれば、有益な讀書が出来る。此の頃、

〇修養の機會

進歩した圖書館・博物館・博覽會・通俗講演・ラヂオ放送などは、知識を廣め、趣味を養ふ好機會を與へる。日々の社會の出來事や、自然物・自然現象の觀察も、活きた學問ではないか。「勉強の暇ひまが無いといふ人は、暇があつても勉強せぬ。」眼前に無盡藏な勉強の機會を有ちながら、之を利用せぬ人は、宛がら、寶の山に入りて手を空しくして歸るのである。

四 我等の人格修養には、別にきまつた時間割はないが、心懸けさへあれば、何處で何をするのも、夫れ／＼修養の機會となる。修養は、善事の實行に越した事はない。善事の機會を見出したら、何でも遁とさず急いで實行しよう。たまたに失策や、失敗を招くことがあつても、徒らに之を悲觀せず、



よく反省して、思慮を練れば、今日の失策や失敗は、却つて他日成功の基を作る。修養に心懸ける人に取つては、失敗や艱難辛苦は、此の上もない人物試練しけんの機會となつて、將來の幸福の基を作る。

**五** よい機會は、奔馬のやうに速かに飛び去る。素早く之を捕へねば、直ぐに取り逃がしてしまふ。「時と潮とは、人を待たない。」素早く機會を捕へるには、沈著冷靜にして、而かも鋭い頭腦の働きが要る。尙ほ其の上に、進取の氣象と敢行の決斷とがなくてはならぬ。この働きのない人は、折角好機會を眼の前に見かけながらも、之を捕へることが出来ぬ。素早く機會を捕へようと思ふ人は、平素の準備が大

素早く機會を捕へよう

切である。我等は平素頭腦を練り、意志を鍛へて、何時でも素早く機會を捕へ得る準備をして置かう。

明治天皇御製

世の中の人におくれを取りぬべし

進まむ時に進まざりせば。

**六** 尾張の中村に生まれて、關白まで出世した豊臣秀吉も、米國の片田舎に生まれて、大統領まで立身したリンカーンも、終生一筋に向上の機會を捕へたのである。本居宣長は、醫業の傍ら、紫式部や清少納言は宮仕への餘暇に、名著を後世に残した。空海が入唐せず、日蓮が出家せず、一生を終つたならば、迎もあれだけの事業が出来たとは思へぬ。

機會を捕へた人々



悲觀者に成  
功者なし

第十二課 悲觀すまい

一 中學校時代の青年は、元氣が充ち満ちて、身體も盛に成長し、精神も著しく發達して、一步步、獨立生活に近づく。併し、時には學校の不成績や、失策、失敗などを悲觀して、俄かに元氣を失ふことがある。それがひどくなれば、遂には健康をも害する。何か目的を達し、希望を遂げるには、何事にもひるまぬ元氣が要る。昔から悲觀する人には、成功者がない。我等は、何時も前途に輝く希望の光に、元氣を振ひ起して、一意成功に突進しよう。

不成績に失  
望すまい

二 小學校で成績のよい人も、中學校に入つて思はぬ不

成績を取ることは決して珍しくない。縦へ生まれつき學才が乏しくとも、根氣よく勉強すれば、必ず相當の成績は得られる。絶えず眞面目に努力さへすれば何時か學習の樂みが出来て、學力は必ず進む。兎と龜の童話を味へば、どれ程頭の鈍い人にも希望の光が現れる。

生まれつき  
の短所を悲  
觀すまい

三 自分より優れた學友と比べて、自分の短所に氣がついて悲觀する人もある。人には短所もある代りに、又何か他人の及ばぬ長所もある。短所には氣がついても、長所には氣がつかぬ事もある。稀には、自分で短所と思つてゐた事が、本當の長所である事もある。生まれつきの短所であつても、早くから努力修養すれば、これに打勝つことも出来る。



る。我等は、短所を悲觀するよりも、努めてこれに打勝つ元氣を振ひ起さう。尙ほ子供や青年の時代に、愚物扱ひにされた人が、後に大人物となつた例は少くない。「大器は晩成す」といふ古語もあるではないか。

四 油斷大敵と心得てゐても、失策・失敗をして悲觀に沈み、よい機會を取り逃して失望落膽する事は、誰にもあり勝ちである。併し、悲觀や、失望落膽では機會を取り戻すことも出来ねば、失策又は、失敗を成功にし直すことも出来ぬ。之に反して、元氣を振ひ起して、失策・失敗の原因を究め更に成功の途に勇み進んで行けば、失策・失敗は却つて大成功の基を作る試練となる。縦へ誤つて轉んでも、一度轉んだ位

失策失敗に  
失望すまい

高子曰く、  
我曰く、  
一度カエリミル

失敗や不運  
の試練を味  
はう

でへたばらず、轉んでは起き、轉んでは又起き上がり、七轉び八起きして、根氣強く努力前進すれば、遂には目的を達して希望を遂げる。

五 暴風の多い島に生長した松の根が固いやうに、失敗や不運で練られた人物は、堅固である。失敗の苦がい經驗を嘗めた人は、滅多に同じ失敗を繰り返さぬ。不運で練られた人は、少々の不運は何とも思はぬ。之に反して、生まれてから、これといふ失敗もなく、又さしたる不運にも出會はず、する事なす事が思ふ通りに行き、あまり順調に成功した人は、却つて思ひがけぬ大失敗を招く恐れがある。我等は成功に達する試練と思つて、失敗や不運の教訓を味はう。



良心は眞澄  
の鏡のやう  
である

第十三課 心の鏡

一 人の生まれつきの純眞な心には、虚偽・虚榮・偽善の曇りもなく、曲りも、僻みもない、正しく直き誠がある。これを良心と名づける。良心は、研ぎたての眞澄の鏡のやうに、善悪をありのままに映し、公平無私の裁判官のやうに、自他の行爲に嚴正な判断を下す。人に知らせぬ祕密も、良心は知つてゐる。人には隠しても、良心には隠されぬ。人は欺き得ても、良心は欺き得ぬ。人には誰も、眞澄の鏡のやうな良心が具はつてゐる。これは神の心にもかよふ人の心の誠である。

鏡の曇りを  
拭はう

偽りのない  
我が心の姿  
を見よう

二 我等がともすれば、虚偽や虚榮に囚はれたり、狭い心から曲り、僻むのは、心の眞澄の鏡が、我が身勝手な塵や埃で曇るからである。我等は、此の塵や埃を拂ひ、拭うて、いつも心の鏡を研ぎすまさう。如何に曇つた鏡でも、根氣よく研ぎ磨けば、澄みきるやうに、どれ程汚れた心でも、根氣よく修養を積めば、清く澄まぬ事はあるまい。古歌に

研ぎ得たる心ゆるすなます鏡、思はぬ塵のかゝる世の中。

三 池の面に波が立てば、物がはつきりと水鏡に映らぬ。我等の心に、私慾や感情が動いてゐれば、我が姿の善悪が、はつきりと心の鏡に映らぬ。偽も飾もない、有りの儘の我が姿を見ようと思へば、よく氣を落ちつけて、靜かに心を澄ま



さねばならぬ。課業や仕事に追はれて、二六時中あわたしく暮してゐる人も、夜更けて、獨り心靜かに反省して見れば、其の日の事が、善惡共にありくと眞澄の鏡に映つて來る。これは偽のない我が心の姿である。我等はよくよく此の姿を見きはめて、其のふりを直す修養を積まう。

四 圖らず姿見の前を通つて、顔の汚れに氣がつけば、誰しも、慌て、拭き取る。これは、汚れた顔を人に見られるのが恥づかしいからである。自分の悪い事を人に見られて恥づかしいのも、同じ心である。自分の悪い事が、人に知れた時は勿論、人はまだ氣がつかなくても、自分に惡かつたと氣がつけば、立ちどころに自責の念が起つて、我ながら恥づ

恥を知れば  
恥は無くなる

かしくなり、自ら顔が赧らむ。これは心の眞澄の鏡に我が心の醜い姿をありの儘に映して、其のふりを直さうとする誠の心が起つたからである。「赤面は徳の色である。」恥を知る心は、尊い良心の閃きを示す。此の心さへあれば、過をしても決して其の儘には捨て置かず、必ず過を改めて、善に遷る修養をする。「恥を知る者は恥かゝず」といふ俚諺がある。過を悔い改めて善に遷れば、最早過はなくなつて、心は安らかになる。惡事と知つて平氣で行ひ、罪を犯して何とも思はぬ人は、良心が麻痺して、自責の念や恥を知る心が弱り果てたのである。こんな人でも、一旦翻然と改心さへすれば、良心は必ず蘇生する。



一月十一日

修身の教を守れば心は晴やかである

### 第三學期

#### 第十四課 心を晴やかに有たう

一 眞面目に勉強し、熱心に修養し、活潑に運動して、身體精神共に健全に發達し、學業もずん／＼進歩して行くのは、此の上もない樂みである。よく衛生を守れば、身體は健全に、氣分は、晴やかになつて、病み煩ひの生ずる隙間がない。勤勞を尊び一心に仕事に勵む人は、心に喜びが満ちてゐる。いつも心の鏡を磨いてゐれば、少しの曇りもなく、明かるく清く晴やかである。失望せず、悲觀せず、勇氣を出して、きびきびと善い事を實行する愉快を味ふ人は心に、惱み苦みの生ずるひまがなくて、何時も、楽しく晴やかである。これが

いき／＼した青年の心持である。

明治天皇の御製に

さしのぼる朝日の如くさわやかに

もたまほしきは心なりけり。

二 身體に病み煩ひがあつても、心に惱みや、悲みがあつても、氣分が重く鬱いで暗い陰氣な氣持になり、何をするにも物憂くなる。これは多く修身の教を守らず、修養の心懸けがよくない結果である。暗く鬱いだ氣分では、勉強も、修養も、運動も、仕事も、交際も、決して思はしく行かぬ。これは、日當りの悪い、薄暗い所では、草木が、のび／＼生長せぬと同じ道理である。身體が健全に發育するには、日光にあたり、

暗く曇つた心は心身の發達を妨げる



新鮮な空氣を呼吸することが、必要であるやうに、精神が素直に伸びる爲には、晴れ渡つた大空に、旭日のさしのぼるやうな、さわやかな心持が大切である。

三 人は悲觀すれば、氣がふさぎ込むけれども、心を晴やかに持てば、益、晴やかな心を生み出して、一生が明かるく幸福になる。心が晴やかであれば、修學も仕事も能率が上がつて、喜びと樂みとが自然に湧き出て、心は益、晴やかになる。苦み悩みが多く、不平不愉快が積もり積もれば、氣がふさぎ、仕事がいやになる。併し、氣は心の持ちやうで變る。いやな氣を苦にすれば、益、いやな氣がつのる。心を晴やかに持つ修養を積めば、苦惱や艱難辛苦に出遭つても、元氣よく切

晴やかな心  
持は益、晴  
やかな心を  
生む

抜けられる。

四 人の心持は、其の儘顔色に顯れる。晴やかな心持の表情は心地よい笑顔である。にこやかな人には話がし易く、互に打解けて氣持よく交際が出来る。顔つきのよくなれば、感じの悪い人には、心易く近づきにくい。愁へ顔や、澁い顔や、にがい顔の氣むづかしい人には、誰も氣がねして、自然に遠ざかる。かやうな人の生活は、何となく薄暗く不景氣である。にこやかな感じのよい人には、何時となく仕合せが向いて来る。「笑ふ門には福來る。」福は即ち仕合せで、喜び祝ふべき事である。誰でも心に嬉しいことがあれば、にっこりと笑ふ。随つて福の來た家から笑ひ聲が出るとも

笑ふ門には  
福來る



言へる。いつもにこ〜顔をしておる人は、自然に人氣が集つて、我が身に幸福を招く。

第十五課 孝の心

孝の心は親心に養はれる

一 何の辨へもない子供は、自然に親に慕ひ寄る。親と子とは全く一心同體であつて、其の心には少しの隔てもない。親のあたたかいやさしい心は、何時となく無心の子供に通じて、美しい眞心の若芽を養ひ育てる。子供が親を慕ひ、其の爲に盡す眞心が素直に伸びたのを孝の心と名づける。孝の心は親が我を忘れて、はぐくみ育てたと同じ心で、親を慕ひ、親に仕へる子の眞心である。親を養ひ、親を勞は

感恩

り、そして幾分でも親の心を安んじ喜ばせたいと努める心である。孝の心は、子供の眞心から自然に湧き出る。親の身に何事か起つた時に、直ちに駆けつけない子があらうか。  
二 炎天の遠足で咽喉が渴いた時に、水筒の水を飲ませて貰ひ、俄雨に傘を貸して貰つても、どれ程あり難く思ふであらう。これが感恩の心である。心から嬉しく有難いと思つた時、何とか返禮をしたと思ふのは、自然の人情である。これを報恩の心と名づける。他人から受けた少しの親切や好意に對してさへ、報恩の心が起る位であるから、まして生まれ落ちてから、長い間に受けた、限りない世話を思へば、深い〜親の大恩に感謝せずには居られない。此の



感恩の念が強ければ、親を敬愛する心も深くなる。親は固より初から報酬を求めて子を育てるのではないが、子でありながら親の大恩に酬いようといふ心の無いものは自然の人情に背いた不孝者と言はねばならぬ。

明治天皇御製

獨り立つ身になりぬとも育おほし立てし

親のめぐみを忘れざらなむ

三 親は子の爲に生きてゐる。親の心は、ひたすら子の幸福を祈る許りである。子は素直に親の意に従つて行けば、それがやがて自分の幸福になり、又親の幸福にもなる。みだりに親の命に背き、我が儘勝手に振舞へば、親不孝にな

從順

はげまうまうは  
あやまるといふ  
我身いつても  
花を七つゆり  
おむすことつて  
しみおほしむつ  
らんやと接子

安意

る上に、屹度我と我が一身を危ふくする。親を敬ひ親に従ふことは孝行の要道である。

四 子は親を忘れる事があつても、親は決して我が子を忘れぬ。かく片時も子を忘れぬ親の心を安んずる事は、孝行の大切な道である。我等は身體を大切にし、學業を勵んで親の心を喜ばせよう。兄弟姉妹よく助け合つて、親の心を安んじよう。絶えず熱心に修養し、早く立派な人間となつて、親を喜ばせよう。

五 子が親に孝養を盡す程美しい自然の道はない。親を構はぬ人は、自然の道に背いてゐる。我が子を持つてから親の恩を思ひ知り、始めて孝行しようとする時には、兩親

孝養



孝行を重んずるは我が國の美風である

は最早多くは此世にいまさぬ。

六 孝行を重んずるのは、我が國古來の美風である。昔から世に表彰された孝子は各地方に、數へ切れない程ある。我等は小學校で孝行について多く學んだ。中江藤樹は老母の孝養に一身を捧げて、近江聖人と呼ばれた。二宮金次郎は母の心を慰め、渡邊登は父母の心を安んじたなど、孰れも孝子の手本に擧げられてゐる。又上杉鷹山は養父に、山城の儀兵衛は養母に、力限りの孝養を盡した。富めるも、貧しきも、尊きも、卑しきも、子を思ふ親の心は、皆一つであるやうに、親に盡す孝子の眞心も、皆一つである。この眞心を以て君に仕へれば、それがやがて忠の心となる。忠孝一致の

孝は百行

其

み民われ生ける

しるしあり

大君のセカやく

御代にあひく

思へば

思想は、我が國民道德の大本である。

第十六課 家の爲に盡さう

家庭の和樂

一 家は、本來、親が子を育てるために、自然に出來たものである。親子が一心同體であるやうに、兄弟姉妹も一つの家の内に親密に睦<sup>むつ</sup>び合ふ。家庭は、又とない平和な楽しい場所である。寄宿舎や、下宿に入つては、我が家を思ひ、他所に旅行して故郷を戀しがるのは、其の爲である。土地は片田舎であつても、建物はいぶせくとも、庭園の美はなくとも、我が家に越して懐しく、慕はしいよい處は世界の何處にもない。我等は何時も晴やかな、うちとけた心で、家族互に睦<sup>むつ</sup>

忠  
孝  
の  
爲  
に  
盡  
さ  
う



子供の徳性は家庭和樂の中に發芽する

び合ひ、親み合つて、一家の團樂を樂まう。

二 一家團樂の生活には、ありのまゝの眞心が現れる。

親子兄弟の間には、包み匿しもなく、偽も飾もない。随つて誰に遠慮も氣兼ねもいらぬから、何時も、のびくとした心持になつて、少しも抑へつけられるやうに思はぬ。子供の徳性は此の春のやうに、温かく、楽しい平和な家庭生活の中に、芽をふいて、素直に伸び始める。立派な人物といはれた人は、皆よい家庭の内で大事に育てられてゐる。

三 我が國の社會組織は家が本になつてゐる。國は家を大きくしたものは、家は國を小さくしたものである。小さい國のやうな家が集まつて、大きな家のやうな國を作つて

我が國の家は小さい國である

ある。こゝに我が國體の基礎がある。我等日本國民は、皆

同じ先祖から出た大きな一大家族であつて、皇室は此の大家族の宗家であらせられる。皇室と我等の家とは、恰も大木の根幹と枝葉のやうに、其の間に一つの生きた命脈が通つて、互に繋がり合つてゐる。日本といふ大木が、無窮に榮えて行くには、根幹と枝葉とは、寸時も切り離してはならぬ。

萬世一系の皇室が、連綿と續かせられるやうに、我等の家も、永代に續かねばならぬ。而かも家を重んじ、家の爲に盡す事は、我が國古來の美風である。我が國の家には國の精神が籠つてゐる。一國を治め給ふのが天皇の御位であり、一家を治めるのが家長である。家長は、法律上戸主といひ、戸



家の繁榮を  
圖らう

主の位は、之を先祖に承けて、永遠に、子孫に傳へる。我等は、我が國の家にこもる特有な意義をよく理解して、家の爲に盡す事によつて、國の爲に盡す精神を養はう。

四 我等の家は、其の源に溯れば、幾代と數へきれぬ程遠い先祖から、血統を引いてゐる。恰も大木の幹から次々に枝が分れ出るやうに、本家から段々に分家が出来た。家々の先祖には、遠い近いの違ひはあるが、家系はそれ、永遠に存立してゐる。代々の親は先祖の血統を承け繼いで、之を子孫に傳へ、子孫は更に又之を子々孫々に傳へる。個人としての死生はあるが、血統其の物の死生はない。代々の戸主は、家を代表し、先祖を祭つて崇敬の誠を盡し、又先祖の

遺志を繼いで、家門の名譽を重んじ、家族と力を協せて、家の繁榮を圖つた。これは親に對する孝行の延長である。家族は、同じ船の乗組員のやうに、名譽も、利害も、其の他あらゆる運命も、皆共同共有である。随つて、家の榮えるも、衰へるも、皆家族共同一致の力による。我等は、出来る限り協力して、家の爲に盡し、家の繁榮を圖らう。

五 一人の力は弱くとも、數人團結すれば、強い力になる。人の團結には、色々の種類があるが、家族の團結ほど、親密且、鞏固なものはない。これは親子といふ骨肉の血縁による。親子の血縁は、如何なる力でも斷ち切ることは出来ぬ。「兄弟牆に鬩ぐとも外其の侮を禦ぐ」といふ古語の通り、同胞に

家族の團結  
を固くしよ  
う



は、偶、内輪もめがあつても、いざといふ場合には、屹度家の爲に、一致團結する。諸方に散りくゝに住んでゐても、家族の心は、何時も堅く結び付いてゐる。我が國民は、同じ先祖から出た血族團體であるから、全體が親しい家族同志の關係である。我が國民の團結は、家族の團結と一様に最も親密、且鞏固である。我が國の君民關係は、宛も父子關係の如く、我が國民は、皇室を中心として、一致團結して、美はしい國體をなしてゐる。我等は、戸主を中心として、一致團結し、家長を尊び、長上を敬愛し、立派な家風を作つて國民團結の基礎を固くしよう。これが我が國の家族精神である。

あてになる人

第十七課 あてになる人

一 俄かの雨風で、とても來ぬと諦めてゐた人が、約束通りに時刻も違へず、きちんと尋ねて來た時には、どれ程嬉しく頼もしく思ふであらう。容易に言はれぬ祕密を打ちあけても、決して他に漏さぬといふ人があつたら、どれ程安心が出来るであらう。どんな大事を頼んでも、快く引受けてくれる親友があれば、どれ程頼もしく心強く思ふであらう。賄賂にも誘惑にも心を動かさず、私利私慾を捨て、誠實に公職に盡し、公益を圖る人には、どんな大事を託しても、不正や、不始末はあるまい。約束や、祕密を守り、正直一途の



人は、本當に間違ひのない、あてになる人である。世の人が誰も一樣にあてになる人であつたならば、詐欺や背信がなくなり、面倒な規則や、手数が省けて、社會の生活は、どれ程、安全平和に行はれるであらう。

あてになる人は約束を履行し又よく祕密を守る

二 あてになる人は、約束を履行する。約束を履行する人は、實行の出来ない事を輕々しく引受けぬ。西諺には「約束をなすは遅々として、之を履行するは速かなれ」とある。我等は約束の諾否に就いて、前以てよくよく考へよう。あてになる人は又よく祕密を守る。公言してならぬ事は如何なる誘惑や、壓迫に遇つても、決して公言せぬ。

あてになる人は信義を重んずる

三 あてになる人は信義を重んずる。信義を重んずる

人は己を信ずるやうに、人を信じて疑はず、自ら欺かぬやうに人を欺かず、誠の心で正しい道を踏んで行く。信義を重んずる人には、偽や飾がなく、正直一途である。親友の交は、信義の交である。「富貴の人には、友達が出来易いが、貧賤の人には友達が少い。」併し、金錢で出来た友達は、金錢で破れる。「金錢や利益を離れて互に助け合ひ、勵み合つて、一生苦樂を共にするやうな親友を有つことは、誠に頼もしく心強い。困つた時に本當に頼みになるのは、親友である。我等は、篤く信義を守つて、眞の親友を得よう。自ら率先して信義を守れば、人も亦、我に對して信義を守る。「己れ人を信ずれば人も亦己を信ずる。」社會に於ける信用の基礎は、かや

大切



うにして出来る。社會の人が、廣く信義を重んずるやうになれば、信用の基が固くなつて、社會の生活は、家庭のやうに平和、且、幸福に向ふ。信用があれば、他人も兄弟のやうになり、信用がなくなれば、兄弟も他人同様になる。信義を重んずる社會は、進歩した社會であり、信義を重んぜぬ社會は、開けぬ社會である。信用ある國民は、次第に榮え、信用のない國民は、次第に衰へる。我が國の武士は、特に信義を重んじて「武士に二言なし」といふことを誇とした。今日の日本人には、どこまでも、此の精神が有つて欲しい。

あてになる人は責任を盡す

**四** あてになる人は責任を盡す。自分の爲すべきことは、如何なる困難に出遭つても、間違ひなく、之を爲し遂げぬ

間は、決して満足せぬ。自分の職務を忠實に盡すのも、依頼された仕事に影日向なく精出すのも、此の強い責任感がある爲である。級長や、校友會の役員に選ばれて、忠實に其の任務を盡し、又は運動の選手となつて、熱心に全力を盡すのも、頼み甲斐ある人となる修養の道である。

あてになる人は誠實である

**五** あてになる人は誠實である。誠實の人は己を欺かず、人を欺かず、かりそめにも虚言や遁辭を言はぬから、心に疚ましい所もなく、天地に恥ぢる事もない。貧乏をしても、難儀をしても、毅然として正しい道を行く。「正直は一生の寶」である。約束の履行も、祕密の嚴守も、信義を重んずる事も責任を盡すことも、名稱はそれと違ふが、皆一つの誠實



頼み甲斐ある人々

の心から湧き出る。我等は平常自分に接する人の中で、どんな人を信用し、どんな人をあてにしてゐるか、心靜かに反省して、自らあてになる人となる修養の助としよう。

六 加藤清正が死ぬまで、秀頼に力を添へたのは、伏見の地震に、秀吉の御殿に駈けつけたのと、同じ誠實の心からである。熊澤蕃山は、鞍に置き忘れた金を返しに來た馬子の、誠實に感じ、之を教へた近江聖人を慕ひ、懇請して其の門人となつた。米國最初の大統領ワシントンが、國民の信任を一身に集めたのは、子供の時に父の愛樹を伐り倒した事を包み隠さず自白した、誠實の心に萌してゐる。頼み甲斐ある人は結局約束を履行し、祕密を嚴守し、信義を重んじ責任

感の強い誠實の人である。我等は、誓つてあてになる、頼み甲斐ある人とならう。

### 第十八課 慕はれる人

一 弟妹に、親のやうに慕はれ、友達に、兄弟のやうに親しまれる人は、心のやさしい親切な人である。こんな人は家庭にゐても、學校に行つても、社會に出ても、その周圍は何時も、明かるく暖かい、懐かしい平和の空氣で充ち満ちてゐる。慕はれる人は、信用のある人である。慕はれる人の心は、いつも晴やかである。之に反して、世の中には、やゝもすれば、誰にも嫌はれる人がある。こんな人は、兄弟に嫌はれ、友達

慕はれる人と嫌はれる人



に除け者にされ、甚しきは、遂に社會に見捨てられて、闇い不愉快な思ひをしながら、人を怨み、世を誼ふ拗物とまで、なり果てる。これは、誠に悲しむべき事ではないか。

慕はれる人  
には好き嫌  
ひの心がな  
い

二 慕はれる人には、好き嫌ひの心が無い。どんな人に對しても、濫い廣い懐しい心を有つ。自分の力に出来ることは、誰にも、爲てやらうといふ、やさしい親切がある。人に對して好き嫌ひや、分け隔ての心がなければ、萬人に慕はれる。孟子は、「仁者に敵なし」と言つた。

慕はれる人  
には思ひや  
りの心が深  
い

三 慕はれる人には、思ひやりの心が深い。人の事を我が事のやうに思ひ、人の苦みが我が苦みとなり、人の喜びが我が喜びとなる。此の心はやがて、人々互に助け合ひ親み

合つて、平和に暮さうとする心となる。此の心がなければ、世間に争の止む時がない。孔子は、「己の欲せざる所は之を人に施すこと勿れ」と、教へ基督は、「汝が人よりなされんと欲することは、汝も亦これを人に施せ」と、諭した。この思ひやりのことを、昔から恕の道ともいつてゐる。思ひやりの深い人は、頼もしくあてになる。

平和の理想

四 弟妹に慕はれる人は、親のやうなやさしい心を持つ人である。弟妹にやさしくする心で友達に交れば、誰にも仲よく親しくなる。弟妹にやさしい人は、大抵友達にも親切である。友達に親切な人は、見知らぬ人に對しても自然にやさしい心が顯はれる。世の中の人の子を育てる親の



慕はれる人

優しい心を學んで、互に慕はれるやうに努めれば、我等の社會生活は、段々と平和の理想に近づく。現代の人類は世界を通じて、此の理想に達しようと、熱心に努力してゐる。

五 川に落ちて、流れる敵兵を救ひ上げ、著物や薬を與へ傷を治療させたのは、忠孝兩全の模範と敬はれる楠正行ではないか。粗服を着、人目を避けて、片田舎に戦死者の遺族を慰問したのは、軍神と仰がれる乃木大將ではないか。米國の大統領に選ばれ、國民の父と慕はれ、衆望を一身に集めたのは、巢から落ちた雛鳥さへも、見ぬ振りをして通り過ぎることの出来なかつた、リンカーンではないか。クリミア戦争の傷病者が、生きた天使を見るやうに敬ひ慕つたのは、

小鳥や、家畜にまでもやさしく親切であつた、ナイチンゲールではないか。

### 第十九課 社會奉仕

公益を廣め  
世務を開か  
う

一 道路に危険物や、有害物があるのに氣がついて、直ぐに取除けて置けば、多くの通行人が助かる。落ちた橋を架け換へ、難澁な道を修繕する人がない時に、勞力と費用を惜まず、進んでこれを引受ける人があれば、公衆は大きな便宜を得る。國や、市町村で經營が出来ぬ所に、巨額の私財を抛つて、學校や圖書館、博物館、研究所などを建て、又は慈善救濟、衛生、消防のやうな公共事業を助ける人や、無報酬で生活改



善風俗矯正思想善導などに盡力する人が多かつたならば、社會の公益は著しく増進する。自分の貧乏生活を物ともせず、専心研究・發明に努力する人や、自分の損失を構はず、只管農・工・商業の改良に苦心し、地方に新しい産業や、事業を起す人が多く出れば、有益な業務が次第に開ける。このやうに社會の爲といふ事を第一とし、自分の利益を第二に置いて、進んで公益を廣め世務を開くのが、社會奉仕である。社會奉仕は、社會公益の爲に一身の利益や勞力を捧げることである。

二 人間は、大勢寄り合つて、社會といふ共同生活の團體を作つて、始めて生存を完うするもので、決して一人づゝは

我等は社會から大きな債務を負ふてゐる

なればなれになつて、暮すことは出来ぬ。先づ自然に家族といふ小さい社會が生まれ、家族が集まつて、次第に大きな社會が出来上がる。人類は、禽獸と違つて、いつまでも同じ生活を繰り返すことに、満足せず、少しでも之を改善しようとする。其の爲に、互に助け合ひ、勵み合ひ、最善の努力を盡して、生活状態を向上進歩させる。これが長い間に積り積つて、社會の文化となる。文化は自然に出来た生活状態に、人智を以て改善を加へた結果に外ならぬ。今日の進歩した政治・經濟・言語・風俗・道德・宗教・學術・技藝等の文化の各方面は、決して一朝一夕に出来たものでもなく、又一人や二人の力で造られたものでもない。此等は、古今東西の無数の人



人が向上發展の爲に努力した結果を綜合したものである。つまり社會全體の協力互助の賜物である。我等が毎日用ひてゐる衣服にも、食物にも、電燈にも、瓦斯にも、それ〴〵世界各國の人々の研究工夫が加へられてゐる。此等の日用品は勿論、名譽、財産、地位に至るまで、凡そ我等の生活を幸福にするものは、悉く社會文化の賜物であつて、若し我等の社會が野蠻未開であつたとすれば、我等は、決して夢にも、此等の恩恵を受けることは出来ぬ。我等文明人が、毎日受けてゐる豊かな生活の福利は、皆社會に負<sup>か</sup>ふてゐる我等の債務<sup>むいむ</sup>である。社會奉仕の本旨は、結局此の大きな債務を返すことである。文化が進歩するにつれて、我等の債務も益々大き

## 社會奉仕の道

くなり、社會奉仕の責任も亦次第に増加して來る。

三 社會奉仕の道には色々ある。生徒の身分として、家の爲に盡し、學校の爲に盡すのも、手近い社會奉仕の道である。獨立生活を營む人が、公共事業の爲に、私財を寄附し又は、勞力を惜まぬのも、進んで公益を増進する名譽職に就くのも、均しく、社會奉仕の道である。自己の職業に従事する人も、自己の利益の爲より、寧ろ公益の爲に力を盡せば、矢張り社會奉仕になる。飢饉や天災の時に、食料品や日用品の廉賣をするのも、社會奉仕である。報酬に頓着せず、公益を主とした、精神的事業や社會事業に従事するのも、矢張り社會奉仕の道である。



我が國民の  
社會奉仕の  
精神はまだ  
不十分であ  
る

四 我が國民には、家と國とに奉仕する精神は、昔から發達してゐるが、一般公衆の爲になる、社會奉仕の思想は、遺憾ながら、まだ幼稚である。我が國の道路が、まだ概して悪いのも、公益事業や、慈善救濟の事業が振はぬのも、その爲である。市町村の各種の團體や、組合會合などに成績不十分なのが多い事も、社會奉仕の精神に乏しい爲と言はれてゐる。社會からあらゆる福利を受ける許りで、少しも之を返す心の無い人は、文明の恩恵を盗んでゐると同様である。我等は社會に重い債務を負うたまゝで、少しも返さずに死ぬことは、此上もない恥辱ではあるまいか。

社會奉仕の  
人々

五 佛國のカーンといふ人は、自分には質素な獨身生活

を送りながら教授を海外視察に派遣する爲に、日本の大學に多額の資金を寄附した。スウェーデンのノーベルといふ人は、遺産の全部を基金として、年々五人づゝ世界の發明家、著述家及び平和論者に、巨額の賞金を贈るやうに遺言した。米國の有名な富豪、カーネギーも、ロックフェラーも、公益事業の爲に幾億萬弗の財産を社會に提供した。我が國にも、近年富豪が、學校、病院、圖書館、公會堂その他の公益事業に私財を寄附する美風が發達して來た。此の外無報酬や、薄給で一生を社會奉仕に捧げた人は、各國共數限りない程多い。社會奉仕の精神の盛な國は、文化の進歩が著しい。



第二十課 國史の誇

國史の意義

一 我が國の歴史は大和民族といふ君民同祖の血族團體が、太古から今日まで成長發達した道行を、如實に物語る記録である。國史の中には、我等の祖先が、其の時代其の時代に、最善と信じて行つた事業の沿革が述べられてあるから、開闢以來次第に向上發展して來た、國民の理想や生活状態が窺ひ知られる。國史は、實に大和民族の傳記物語として、神代このかた、さながらにうけついで來た君民一體の我が國體の精華を、有りのまゝに表現する。建國以來、上に萬世一系の天皇を戴き、萬邦無比の國體を成して、唯一度たり

建國の大本

とも外敵に辱められたことなく、國運隆々として發展して來たことは、我が國史の何よりの誇ではないか。

二 天祖天照大神は、皇孫瓊杵尊をこの國に下し給ふ時に、豊葦原瑞穗國は我が子孫の君たるべき地なり。汝皇孫ゆいて治めよ。寶祚の隆えまさんこと天壤とともに窮なかるべし。との神勅を賜つた。これは我が建國の大本であり、同時に我が國體を規定する帝國憲法の大精神である。天祖の神勅が文字通りに嚴然たる事實となつてゐる事は、我が國史の何よりの誇ではないか。

三 神武天皇は、大和地方を平定し、都を橿原に御定めになる時、今當に山林を披き宮室を營みて、恭しく寶位に臨み

建國の規模



列聖の御盛徳

て國民を鎮むべし。かくして、上は天神の國を授け給ひし徳に答へ、下は皇孫の正を養ひ給ひし心を弘め、然る後、六合を兼ねて都を開き、八紘を掩ひて宇とせんこと亦可からずや」との詔を下し給はつた。我が建國の規模は、此の通りに宏遠である。これはやがて、歴代天皇の大御心として、將た又我が國民の大理想として、我が國史の誇ではないか。

四 歴代の天皇は、天祖の神勅に基づき、身を正しうし道を行ひ、子のやうに國民を愛撫して、深厚な教を垂れ給うた。其の數多い中にも、仁徳天皇は、高臺に登つて、民の竈の煙が微かに昇るを嚮はして、三年の課役を免じ給ひ、醍醐天皇は、寒夜に御衣を脱いで、人民の疾苦を察し給ひ、龜山天皇は、元

列聖の御盛業

益、國體の精華を發揚せよ

寇の際、御身を以て國難に代らんと祈り給ひ、明治天皇は質素勤儉、夙夜國民を思ひやらせられ、日清戰役の際には、廣島の大本營で將卒と苦難を共にし給うた。我が國の君民關係は宛も父子關係の如く、全國は一大家族のやうである。

五 御歴代の天皇は、常に大御心を、文武の政に用ひ給ひ、或は農業を勧め、或は工藝を興し、或は制度を定め、或は文教を盛にして、専ら國運の發展を圖り給うた。列聖の御盛業は一として、御盛徳の發露でないものはない。殊に、明治天皇の御治世に於ける我が國未曾有の發展進歩は、世界の驚異として、此の上もない國史の誇ではないか。

六 我等の祖先は、天皇を現神と尊び、親と慕ひ奉り、億兆



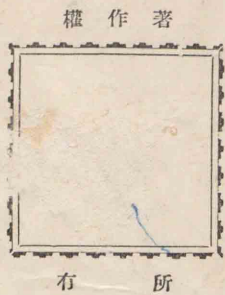
心ヲ一ニシテ世々皇室に忠義を盡した。就中和氣清磨・楠正成・北畠親房の如き人々は、皇室の大事に際して、忠臣の誠を致した。我が國民は、皇室を中心とする血族團體であるから、君に忠を盡すことは、同時に祖先を敬ひ親に孝を盡す所以である。我が國民はかくして、代々祖先の遺風を顯彰した。此の忠孝一致の美風は、やがて皇祖皇宗の御遺訓に適ひつゝ、我が國體の精華を表す。我等はよく建國の大本と、國體の精華を辨へ、天皇の聖訓を奉體し、不健全な現代の外來思想などに惑はされず、祖先と同じ道を踏んで益國史の光輝を發揮しよう。

新制中學修身書 卷二終

文部省檢定

昭和七年二月八日 中學校修身科用

昭和六年十一月八日 印刷  
 昭和六年十一月十二日 發行  
 昭和七年二月三日 訂正再版印刷  
 昭和七年二月六日 訂正再版發行



著者 野田義夫

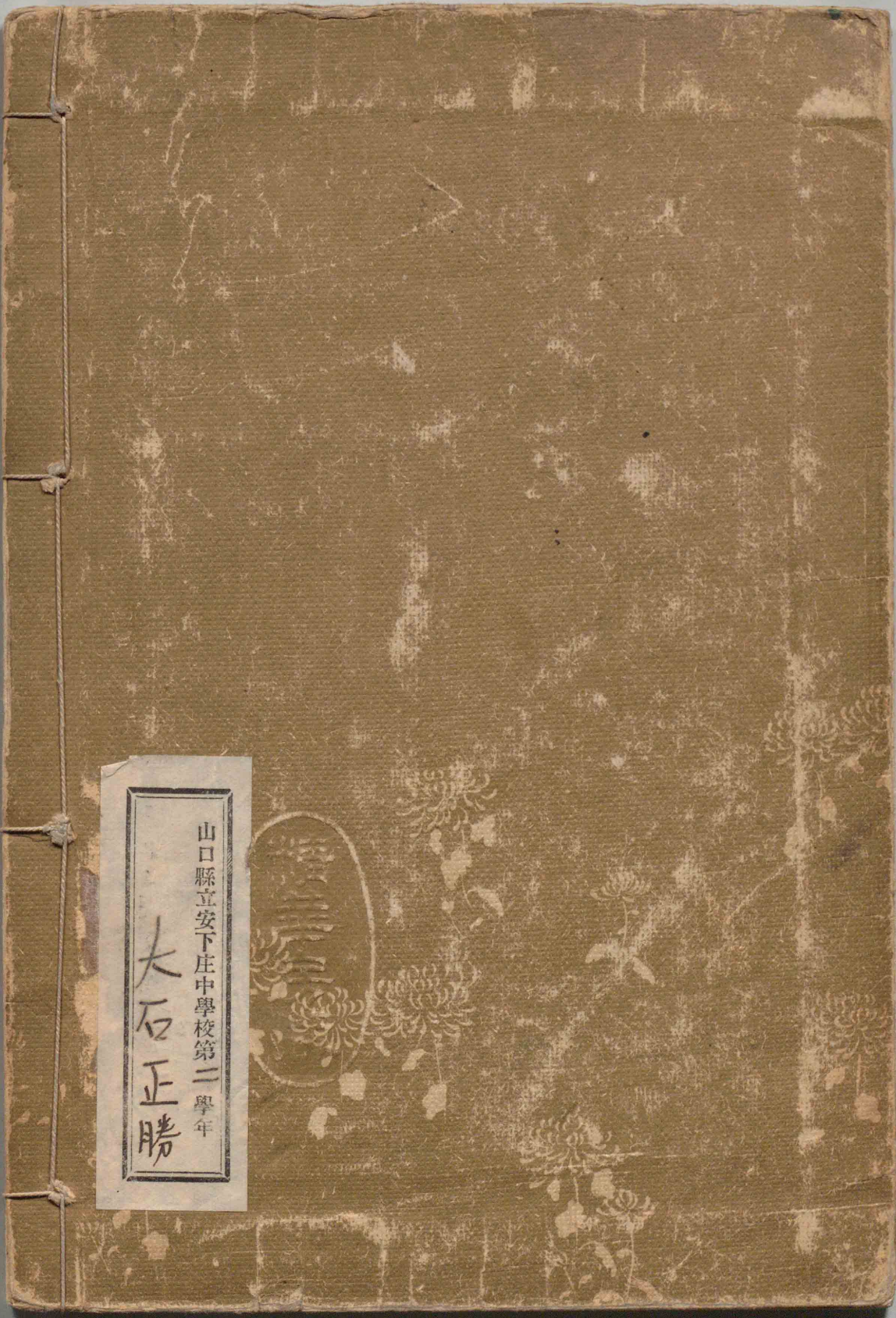
發行所 田口繁藏

大阪市西區京町堀上通一丁目十六番地

發行所 精華房  
 大阪市西區京町堀上通一丁目  
 番替内阪三番番 電話土佐堀三番

新制中學修身書				定價
卷別	卷一	卷二	卷三	卷四
別	一	二	三	四
金	金	金	金	金
五	四	五	四	五
十	十	十	十	十
錢	錢	錢	錢	錢





山口縣立安下庄中學校第二學年  
大石正勝